

从申以申洩而爲電、月令云、仲春雷乃發聲始電、此月陽氣漸盛以擊於陰、故其光乃見、萬寶全書云、正月朔日有電、主人有殃、夏秋之間、夜晴而見遠電、俗云、熱閃、在南主晴、在北主雨、大暑前後有電、早稻薄收、晚稻必大熟、略中按、秋夜晴有電者常也、俗傳云、此時稻實、故稻妻イナツルヒ交名有之、天陰有電者、自其方必風有雨、凡將雷鳴時、必先電一々相添、電須臾有間、則雷靜、無間者雷猛、

〔日本書紀神武三〕戊午年十有二月丙申、皇師遂擊長髓彥、連戰不能取勝、時忽然天陰而雨冰、乃有金色靈鷲飛來、止于皇弓弭、其鷲光暉煜狀如流電、イヒレガ

〔日本書紀景行七〕四十年七月戊戌、天皇持斧鉞以授日本武尊、曰、略中今朕察汝爲人也、身體長大、容姿端正、力能扛鼎、猛如雷電、所向無前、所攻必勝、

〔日本書紀天武二十九〕九年六月丁巳、雷電之甚也、

〔古京遺文〕佛足石歌碑
伊加豆知乃、比加利乃、期止岐己禮、乃微波志爾、乃於保岐美都禰爾、多具霸利、於豆閉可良受夜

〔古今和歌集戀十一〕題まらす
秋の田のほのうへをてらす、稻妻のひかりのまにも我や忘る、

〔古今和歌六帖天一〕いなづま
稻妻はかげろふばかり有し、時秋のたのみは人まりにけり

〔萬寶鄙事記六占天氣〕電、秋晴天にいなづまあるはよし、陰りて電あるは其方よりかならず、風來り雨そふ事あり、これを俗に火をうつと云、夏秋の間夜はれて、とをくいなづま南に見ゆるは

欠しく晴、北にひかるはやがて雨ふる、いなづま西南に見ゆるは明日晴、西北に見ゆるはやがて雨、夏風は電の下より來る、秋の風は電にむかひておこる、
〔兔園小説四集〕虹霓略中、稻光の坤の方に見ゆるは天氣はる、乾の方に見ゆるは雨降る、亂開す